博士論文審査要旨

論文審査担当者

主査 明星大学　教授　岡本富郎
副査 明星大学　教授　垣内国光
副査 千葉大学　教授　伊藤葉子
副査 東京学芸大学　教授　倉持清美

申請者氏名　齋藤政子
論文題目　「3 歳未満児保育と「もの・空間」の発達的意義―保育所及び乳児院における 1，2 歳児の保育室環境に焦点をあてて―」

（論文審査の結果の内容）

本研究は、日本の 3 歳未満児保育について歴史的な考察を行ったうえで、保育所と乳児院をフィールドとして、そこでの保育の実際に依拠し観察をおこない、さらにそこで働く保育者への質問紙法による意識調査を実施し検討しながら、1，2 歳児の発達と保育環境との関連について検討した。その際、1，2 歳児の発達という側面から物的空間的環境の意味とあり方を考察するために、「もの」「空間」を切り口として、1，2 歳児保育における「もの」「空間」の発達的意義とそのあり方について検討した。

1,2 歳児を対象とした研究は、観察法によりデータを収集し質的研究を行った研究と、保育者を対象に質問紙法による意識調査を行った研究に分かれる。そのうち、質的研究では、日常生活の生活活動や遊びの中での「もの・空間」の意味や、環境の変化における「もの・空間」の意味について検討した。

本研究の中で、従来 1，2 歳児の「もの・空間」と幼児の発達との関係を追う研究は国内でも国外でもまとまったものは、なされてこなかったことが明らかにされた。そこにこの論文の独自性が認められる。

（1）本研究から得られた知見

1 歳児は 1 歳半を過ぎると、他者と目標を共有しながら、生活活動の時間的空間的拡大の中で、見通し能力を育てていくことが明らかとなった。またその能力を育てていくうえで「もの」

「空間」が大きな役割を果たしていることが明らかとなった。子ども自身が主体的に行動し「見通し能力」を身に着けていくためには、保育者の言葉かけだけでなく、着脱マットや着脱コーナーなど「もの」や「空間」の「機能性」も、1、2歳児の「見通し能力」を支え育てていることがわかった。

また、入園したばかりの1歳児は、「もの」から意味や情報、価値などを受け取り、それをある「空間・場」で他者と共有する。事例によれば、子どもは受け取った意味や情報から、安心感を持ったり、相手の気持ちを感じとったり、何かを想起していた。そのため、子どもは、慣れ過程という特殊な環境下でも、「もの」や「空間」と積極的に対話し、環境から「意味」を見出して利用していくのではないかということが示唆された。「ひと」との間だけではなく、子どもは物的空間的環境との間でも相互交渉を行っているのではないかと考えられた。

他方、乳児院における研究では、1，2歳児の環境変化においては、「ひと」「もの」「空間」という3種類の心理的拠点の存在が重要であることが明らかとなった。乳児院で暮らしている3歳未満児にとって「落ち着き」や「親しみ」、「くつろぎ」が「もの」「空間」に存在することが、いかに重要かが、アクションリサーチの中で得られた。さらに、「生活活動」に関する「もの・空間」を子どもに見えやすくすることは、子どもの生活活動への意欲を引き出すことと密接に結びついているということがわかった。

次いで本研究では、保育所保育者は保育環境における「もの・空間」についてどう捉えているかが追求された。3歳未満児の保育環境に関する質問紙法による調査を行った結果、第一に「保育者の視野の広さが反映された環境」「日常のケアのための十分な環境」「安心感のある快適な環境」「子どもの主体性が配慮された環境」の四つの因子が抽出された。その中でも、「保育者の視野の広さが反映された環境」と「安心感のある快適な環境」は、保育者歴が長いほど、年代が高いほど、保育者の実施度が高いことがわかった。第二に、「日常のケアのための十分な環境」と「勤務する園の運営主体」との間で有意差（1%水準）があり、「子どもの主体性が配慮された環境」と「クラスの子どもの年齢」との間で有意差（0.1%水準）があることがわかった。

この問題を乳児院の保育者にもアンケートで聞いた。結果を要約すると、第一に、乳児院保育者への保育環境に関する調査では、「もの・空間」に関する項目のほうが、「ひと」環境に関する項目よりも平均値が低かった。実施度も重要度も、上位10項目の中では「ひと」項目の割合が多く、下位10項目の中では「もの・空間」項目の割合が高かった。これは、保育所保育者を対象とした調査でも同様の結果が得られており、3歳未満児保育において子どもの遊びと生活を支える保育環境を見直す際には、保育者はまず「ひと」環境を重視するのではないかと示唆された。第二に、実施度に関する54項目について因子分析を行った結果、「主体的な遊びと生活」「応答的で温かいコミュニケーション」「十分なケアと動と静のある空間」「室内外の安全性と設備の充実」「発達段階にあったおもちゃの充実」の五つの因子が抽出された。

（2）本研究では1，2歳児保育における「もの」「空間」に必要な質が何であるかが追求された。その結果、3歳未満児保育における「もの・空間」に必要な質としての「主体性」「関係性」「個別性」「機能性」「安定感」「安心感」「充実感」の七つを質が考えられた。もちろん「安全性」は第一義的に重要な「もの・空間」の質である。また、発達に配慮されていることや日常のケアのために衛生的で十分な設備・家具が用意される「快適性」も重要である。また、1，

2歳児の保育環境における「もの・空間」は、これらの質を含みながら、以下のような発達的意義を持っていることがわかった。

1. 1,2歳児の発達に応じた「主体性」を支え、育てる役割
2. 「個別性」を重視し、その子の「心理的拠点」として「安心感」を保障する役割
3. 他者との「関係性」を支え育てる役割
4. 「機能性」と「安定感」をもった環境構成で「見通し能力」を支える役割
5. 「充実感」のある活動を引き出す役割

（3）本研究の意義と課題。本研究の意義は、第一に、日本の3歳未満児保育の歴史を押さえながら、3歳未満児、特に1，2歳児にとっての「もの・空間」の発達的意義を検討したものは、まとまった研究としては例がなく、その意味で、日本の3歳未満児保育の発展に貢献しうるものであるということ、第二に、1，2歳児を生活主体として位置づけ、主体形成が3歳未満児保育の実践の中で行われている事実を観察研究の中で確かめたことである。個の視点と集団の視点の両方を持って1，2歳児保育のあり方を検討することができたこと、第三に、観察研究で得られた知見を、保育所・乳児院双方の現場の保育者と実践の中で検証しつつ、3歳未満児保育における「もの」「空間」に必要な質とは何かについて検討したことである。今後は、保育者への面接調査のデータの分析などを通して、1，2歳児にとってのケアと教育の一体的な提供をどのように行うべきかという議論に貢献しうる研究の蓄積を行うことであろう。

以上、本研究は、先ずテーマに独自性があり、研究目的と方法が的確に考えられ、その成果が具体的に表現されているものであると言える。今後の1，2歳児保育における「もの・空間」の発達的意義の研究を進める上で貴重な論文であることが明白に示されている。論文審査においては審査委員から用語の概念等に関するいくつかの内容に関する指摘がなされ、今後の研究に生かしていくことが話し合われた。しかし論文の内容は貴重なものであり、よって、本研究は博士（教育学）の学位を授与するに十分価値あるものと認める。

（試験および試問の結果の要旨）

専門科目並びに外国語に関する試験はいずれも優秀な成績で合格した。論文に関わる専門的な内容に関する専門科目としての質問に対して的確な答えが述べられた。外国語に対しても論文に出てくる専門用語などに対する質問について的確な答えがあった。

以上、審査委員全員による慎重な論文の審査、口頭試問を合格と判定し、並びに専門科目、外国語の試験の結果を、合格と判定した。